

第9章 「役に立つ過去」としての「パストラル語法」 ：映画『廿日鼠と人間』（1939）の映画音楽について

だけど、二十日鼠よ、おまえたちばかりじゃないよ、きめてかかったことがはずれるときもある
じゃないか、二十日鼠や人間がよくよく考えてやったことでも、ときにはくいちがうことがある。
ただ苦しみと悲しみだけがあとに残って、あてにした悦びなどやってこないこともあるのさ。

—— ロバート・バーンズ『二十日鼠に寄す』

9-1. 製作の背景、シノプシス

9-1-1. 製作の背景

ドキュメンタリー映画『都市』の成功は、コーブランドがハリウッドへ進出する契機となった。『都市』の万博での初公開は1939年5月26日であったが、コーブランドは1939年3月にその作曲を終えると、それ以降はニューヨーク州のリゾート地にして藝術家村で知られるウッドストック町に滞在し、のちに《ピアノ・ソナタ》の名で劇作家クリフォード・オデッツに捧げる曲を作曲していた。その折、当地に届いた電報が、彼をハリウッドへ誘うものとなる。送り主は、ハリウッドのプロデューサー、ハル・ローチと、フリーの映画監督ルイス・マイルストーン（Lewis Milestone, 1895-1980）であり、製作予定の映画『廿日鼠と人間』（Of Mice and Men, 原出版 1937年）の音楽制作の依頼であった。物語の原作は、のちのノーベル文学賞作家にして、若き頃のジョン・スタインベック（John Steinbeck, 1902-1968）であり、この『廿日鼠と人間』は、国道〈ルート66〉を世界に知らしめる契機ともなる名作『怒りの葡萄』（The Grapes of Wrath, 1939）とともに、スタインベックの出世作にして、1930年代の過酷な西部の農民たちを描いたアメリカ文学の代表作である。もとより文学好きなコーブランド

であるだけに、この作品をさっそく再読し「そこには、偉大なアメリカの作家が手がけるアメリカのテーマがあった。それは相応しい音楽を待っている」とのべて、自らの好機を喜んだ¹。1939年10月、コーブランドは、飛行機ではじめての長旅の末にハリウッドへ赴き、さっそく音楽が未だついていないこの映画を2度見ている。その時点で映像部分は完成していたが、コーブランドは「なぜ、完成するまで、この映画は作曲家を待っていたのか」と不思議がるほど、それはよき出来映えであった²。

『廿日鼠と人間』はハリウッド映画であるが、かつてのサイレント喜劇のプロデュースでしられたハル・ローチによる比較的小規模のスタジオで制作されたのち、配給はユナイテッド・アーティスツ社によるものであった。製作では、しかし、ハル・ローチ自身は一切関わっておらず、そのすべては、監督のルイス・マイルストーンに任されていた。もとよりコーブランドの起用を強く望んだのが、このマイルストーン自身であった。すなわち、上記のすべての状況がここで意味するのは、ハリウッド古典全盛期にあつて、コーブランドは、その映画音楽を、まったく自らの思う通りに作曲することが可能であったということである。実際にそれを裏付けるように、コーブランド自身が以下のように述べている。

彼〔マイルストーン監督〕は、私がよしとすることを行なうのを望んだし、通常では私が受けるだろう「アドバイス」も一切なかった。〔中略〕音楽監督さえも、私のやり方を邪魔しなかったのである³。

このような特例的音楽制作環境の存在を裏付けるような以下の逸話も、コーブランド自身によって示されている。つまり、農場全景をとらえた〈スーパー・ロング・ショット〉の部分において、コーブランドが音楽的な必要から、あと4秒間そのショットを長くして欲しいと要求したことをうけ、マイルストーンは、実際に、その秒数分を追加したこともあったのである。そして、映画史家のジェームス・モナコが指摘するように、このマイルストーン自身も、ハリウッド古典期において、個人的スタイルを表現しえた数少ない「作家主義」の風格をもつ一人であった⁴。コーブランドに与えられた作曲期間は6週間、そして報酬は、1937年の初回ハリウッド交渉時に提示したのと同額の、5,000ドル〔現在換算で約1,400万円〕であった。総じていえるのは、コーブランドの初ハリウッド作品は、このように多くの幸運に恵まれていたということである。

9-1-2. シノブシス

ジョン・スタインベックの『廿日鼠と人間』は、アメリカ文学の古典的名作ゆえに、ここでは簡単なあらすじで十分と思われる。ときは 1930 年代、場所はアメリカ西部カリフォルニア州のサンフランシスコ南部に位置する農業地帯のソルダードである。農場に住み込みで働いては、汽車にのって移動するのをくり返す移動農業労働者、いわゆるホーボーの若い 2 人の男がこの物語の主人公である。この話は、2 人のあらたな住み込み農場のあるソルダードの地に到着した日、つまり木曜日の夕方から、大きな問題がおこる日曜日の夕方までの 4 日間の出来事が語られる。

主人公の 2 人の男は、しかし、あらゆる側面で対照的であった。1 人は、背は小さいが頭がきれて生活力のあるジョージ、もう 1 人は背が大きく力も強いが頭の弱いレニーである。表面上ではジョージがレニーの面倒をみる役割を担っている。ソルダードのあらたな農場で働き出す直前の夜、つまり木曜日の夜、2 人はサリーナス川のそばで野宿する。頭の弱いレニーが日頃もっとも喜ぶこととは、2 人の夢、すなわち、いつか個人農場をもつ話をジョージから聞くことであった。野宿の際もまた、ジョージはレニーから急かされて、およそ以下の調子でいつもの内容を語り始める。「いつか俺たちは土地を買う。そこに小さな家を建てて、牛や鶏や豚、そしてウサギを飼う。おれたちは贅沢に暮らす。冬になって雨が降ったら仕事を休む。暖かいストーブを囲んで座り、そして雨音に耳を澄ませるんだ」との具合である。ここで「ウサギ」が強調されているのは、レニーがそれを喜ぶからであり、なんとならば、手触りの柔らかなものを、彼はことさら好むためである。野宿での就寝のまえ、ジョージはレニーに念を押し、今後、もしあらたな農場で問題を起こして追われる身となったならば、再びこの地で落ち合う約束をする。

住み込みの農場は、一匹狼の移動労働者たちばかりであり、皆、荒くれものにして、勝手に、孤独であった。老人キャンディは宿舎で老犬を飼っていたが、ある者は犬が臭いといい、やおら銃で老犬を始末してしまう。キャンディはなすすべもなかったが、せめて自らの手で楽にしてやればよかったと後悔する。一方、頭の弱いレニーは、仕事のほかでは、もっぱら肌触りの柔らかな子犬を可愛がった。しかし、レニーがさわるものはみな、なぜか命が絶たれてしまうのであり、子犬もまた例外ではなかった。農場主の息子の妻〔「カーリーの妻」〕が、暇と孤独をもてあまし、レニーに近づくようになった。頭のきれるジョージは、そこに災いを予感し、レニーに、その妻にはけっして近づくなと強く命令する。

しかし、ジョージの予感は現実のものとなる。日曜日の午後、やはりその日も暇を持て余した妻が、

レニーに近づき、自らの柔らかな髪を触らせた。柔らかいものが好きなレニーは、夢中で触っていたが、ついに力あまって殺してしまう。いち早くその事態を発見したジョージは、今後予想される農場内でのレニーへのリンチを察し、秘かにレニーを逃がし、あの約束の河原で身を潜めて待つよう命じる。農場主の息子の妻が殺されたことが、次第に農場内で知るところとなり、その犯人がレニーと特定されるに到り、皆はリンチに処すべくレニーを探す。すでに逃げ場はないと悟ったジョージは決断する。約束した地に向かい、レニーを見つけたジョージは、いつものあの農場の話聞かせながら、夢に恍惚とするレニーを自らの手で殺めるのであった。

9-1-3. 分析に用いた資料

以降の分析で本論が使用した映像資料は、IVC 社が 2004 年に発売した DVD、『廿日鼠と人間』〔IVCF-2316〕である。楽譜資料は、アメリカ議会図書館における〈アーロン・コーブランド・コレクション〉所蔵の、『廿日鼠と人間（楽譜草稿オープン・スコア、鉛筆）』〔BOX-FOLDER 100〕を使用した。この楽譜草稿は、全 74 頁にして 3 段譜でかかれたピアノ・コンデンス・スコアである。なお、この草稿は、現在、議会図書館によってウェブ上で公開されている⁵。したがって、本論の附録資料には収録しなかった。



■ 図 9-1. 映画『廿日鼠と人間』(1939) より結末部 (レニーとジョージ) Public Domain.